

1.悪性腫瘍・臨床統計

[P01-19]A clinical study of the cases of metastatic tumors in the oral and maxillofacial region in our department.

OTomonari Kajita¹, Jun Kitamura¹, Miyashita Hitoshi¹, Shinnosuke Nogami¹, Kensuke Yamauchi¹, Hirokazu Nagai¹, Tetsu Takahashi¹ (1.Division of Oral and Maxillofacial Surgery, Department of Disease Management Dentistry, Tohoku University Graduate School of Dentistry)

ポスターを表示

【緒言】顎口腔領域における転移性癌は口腔悪性腫瘍全体の約1～2%程度と言われ、稀とされている。疾患の認知度が低いため発見が遅れることが多く、口腔転移巣を認めてからの予後は大部分が1年以内とされている。【対象と方法】2014年4月から2019年12月までに東北大学病院歯科顎口腔外科を受診し、口腔悪性腫瘍と診断された398例のうち、他臓器から顎口腔領域への転移性悪性腫瘍と診断された5例(1.26%)とした。評価項目は年齢、性別、原発腫瘍の部位、組織型、治療や転移までの期間、転移巣の部位、治療法、予後とした。【結果】内訳は男性が4例、女性が1例で、初診時の年齢は44から78歳(中央値が50.4)であった。原発巣は肺が2名、腎臓が2名、乳房が1名であった。口腔内の転移部位は上顎骨が1名、下顎骨が3名、上下顎骨が1名で口腔転移巣が発見されてからの生存期間は1か月から22か月であった。原発巣の治療は手術療法が1例、手術・化学療法が2例、治療なしが2例で口腔転移巣の治療は、手術療法が1例、化学療法が1例、治療なしが3例であった。【結語】がん治療の成績向上と担癌状態での生存期間の延長により、今後は口腔転移性腫瘍と遭遇する機会が増える可能性がある。迅速で的確な診断と予後、QOL向上のための適切な治療法選択のため、長期の経過観察と症例数を重ねることが必要と考える。